平成 27 年 9 月 30 日

2015　奈良県立医科大学和歌山県立医科大学
学生災害ボランティアバス　復興支援活動
活動報告書

Ｎ　Ａ　Ｒ　Ａ　　Ｗ　ｉ　ｌ　ｌ
奈　良　県　立　医　科　大　学
学生災害ボランティアグループ

1．活動概要

奈良県立医科大学学生 17 名は、和歌山県立医科大学学生 7 名とともに、平成 27 年８月 17 日（月）から８月 22 日（土）の間、福島県内でボランティア活動などを行った。南相馬市鹿島区では仮設サロンでボランティア活動を行い、南相馬市小高区、鹿島区、相馬市松川浦では津波の被災地を視察した。また、前年９月に通行規制が緩和された国道６号線を使って県内を北上し、福島原子力発電所事故の被害区域の視察も行った。また、福島県立医科大学では福島災害医療セミナーへ参加し、福島の現状と放射線についての講義や災害医療の考え方に関する講義を受けた。さらに、発災時を想定し救急・災害医療のトレーニングを行う演習、放射線の測定実習、リスクコミュニケーション演習を行った。

2．主な活動

17 日（月）	夕方、大阪梅田駅にて参加学生集合 夜行バスで移動
18 日（火）	J ヴィレッジ見学（双葉郡楢葉町） 被災地域の視察（南相馬市小高区、鹿島区、相馬市松川浦）
19 日（水）	仮設サロンでのボランティア活動（南相馬市鹿島区）
20 日（木）	災害医療セミナー参加（福島県立医科大学）
21 日（金）	災害医療セミナー参加（福島県立医科大学）、 磐梯熱海温泉（郡山市）、夜行バスで移動
22 日（土）	朝、大阪駅到着、解散

3. 参加学生

医学科５年：中務智彰

医学科４年：上月志乃、東本晃尚、宮沢嘉英、

医学科１年：伊藤栞、上野芳聖、植村雄大、大岡 和嵩、桂田凜、田中俊志

看護学科１年：井上麻理子、上田ひかり、進藤樹里愛、浜村志保、森岡伸子、森谷佳奈恵、吉川碧

4. J ヴィレッジの視察

J ヴィレッジの駐車場。多くの関係者がここからバスに乗り換え福島第一原子力発電所に向かっている。

J ヴィレッジは1997年に開設された日本サッカー界初のナショナルトレーニングセンターで、福島第一原子力発電所から 20km 圏内･外にまたがる形で立地している。震災前（1997～2011 年）は 12,700 チーム、103 万人の利用実績があり、2002FIFA ワールドカップの際にはアルゼンチン代表がここにキャンプを構えたという実績も誇る。しかし、2011 年の福島第一原子力発電所事故後は自衛隊や消防、東京電力、協力企業などが集合する原発事故拠点となり、トレーニング施設としては活動閉鎖となる。事故当初は福島第一・二原子力発電所への人員輸送の拠点（約 1,500 人/日）、資機材物流拠点、自衛隊及び消防との調整窓口、医療基地などの役割を果たしていた。2013 年 1 月 1 日に東京電力が J ヴィレッジ内に「福島復興本社」を設置し、現在では復興推進拠点としての役割を果たしている。

今回の視察は、この東京電力復興本社の取り計らいで、施設見学をさせて頂くことができた。まずセンターハウスにおいて東京電力の社員 3 名の方に、「東日本大震災以降の J ヴィレッジにおける東京電力の取り組みについて」、「東京電力福島第一原子力発電所の現状と今後の対応について」、「入退域管理棟救急医療室の概要」というテーマでご高話いただいた。その後、屋上から J ヴィレッジの全景を眺めさせて頂いたが、メインスタジアムには単身寮が設置され、11 面ある天然芝フィールドは駐車場となっていた。福島第一原子力発電所で働く関係者の方々自身も被災者であり、このように生活環境を整える必要があるのだという。

今回 J ヴィレッジ視察を実施して良かった点は、やはり東京電力の社員の方から直接、原発事故発生の状況や、様々な問題への対策、収束までの取り組みを聞けた点である。完全な収束まではあと 30～40 年はかかるということだが、それを聞いて、絶対に原発事故は二度と起きてはならないし、そもそも原発は本当に必要なのか？という議論をメンバー内で行う非常に良いきっかけとなった。反省点としては、視察全体が受身であった点である。こちらから東京電力復興本社に依頼したからには、本来はもっと事前に十分な学習をしたうえで視察に臨み、活発な質問や発言をしなければいけない。今後は、そうした積極的に取り組む姿勢を強めていくことが課題である。

5. 津波、原子力発電所事故による帰宅困難区域の視察

前年９月に通行規制が緩和された国道６号線を使って広野町から県内を北上し、通行のみ可能となった福島原子力発電所事故の被害区域を車窓から視察した。車中からは帰宅困難区域の治安維持や規制の応援のために様々な地域から来たパトカーが見受けられた。また福島第一原発の事故処理のための多くの建設関係の資材輸送車や作業員を運ぶバス、他地域で出た除染による汚染物質を運ぶトラックなどが見受けられた。そのため交通量が予想以上に多かった。人の立ち入りが制限されているため、壊れたままの建物や家屋が多く見受けられた。また、汚染物として簡単には処理することが出来ないために、放置され伸び放題となっている道端の雑草も目に付いた。その様子が、復興が進まない帰還困難区域の状況を物語っているようであった。

国道 6 号線を使って広野町から南相馬市へ向かう。帰宅困難区域を示す看板がいたるところに設置されている。

帰宅困難区域を通過後、南相馬市で津波が押し寄せた海岸と小高駅前を視察した。津波の威力を身を持って感じ、また震災当時のままになっている小高駅を見て災害は突然襲ってくるということを実感した。「瓦礫を撤去しただけで原っぱが広がっている、何も変わっていない」「人が歩いていないのが怖い」という声が挙げられた。復興が進んでいない状況にやり切れなさや疑問を感じる学生が多かった。今回はマイクロバスを用いて視察したので、複数の箇所でバスを停めて直接自分の目で確かめることが出来た点が非常に良かった。ただ、一部の学生に運転や現地での解説といった負担がかかってしまったため、今後は運転手を複数名にする、事前学習をさらに深めるといった改善が必要である。

南相馬市小高区　津波よって基礎だけが残った住宅がまだ残っている。

6. 仮設サロン

南相馬市社会福祉協議会の生活復興ボランティアセンターが鹿島区の仮設住宅で行っている仮設サロンに、３グループに分かれて参加した。午前中は各グループで仮設住宅を訪問し、挨拶に回った。玄関先でお話しすると、午後からの私たちの活動を楽しみにしていた方や仮設住宅でプランター栽培しているトマトを下さる方もおり、「住民の暖かい対応に心があたたまった」と感じた学生もいた。午後からの仮設サロンでは、傾聴活動、アロママッサージを行い、学生の出し物として奈良・和歌山クイズを出題した。１つのグループではせんと君が登場した。また、熱中症予防の注意喚起で和歌山

南相馬市鹿島区仮設サロン
クイズで参加者と交流する学生

のお土産の梅干を贈った。仮設住宅では住民のほとんどが高齢者であり、「薬をもらうために病院に通っているが、震災前のように近くに病院がないため移動時間や待ち時間が長く、行くだけでも疲れる」と話され、仮設住宅での住民の健康管理をどのようにしていけば良いのか考えさせられた場面であった。今回は住民の方々に傾聴活動をしながらアロママッサージを体験していただいた。仮設サロンの中がローズやラベンダーの香りに包まれ、住民の方も学生もリラックスして傾聴活動が行えた。住民の方々は震災から 4 年半経ち、気持ちの整理がついてきている様子で震災当時のことを話す方よりも自分の生い立ちや趣味、最近あった出来事を話す方が多かった。学生の中には「一人一人に歴史があり、ただ自分の話をする相手を必要としているようにみえた。」や、「仮設サロンの中にたくさん写真が飾ってあり、『ここでの写真がどんどん増えて困るわ。』と笑いながら話していたが、先の見えない不安な表情をしていた。」と、住民の心の声を感じた学生もいた。震災当時のお話をされる方もいて、「震災や津波の生々しい状況を聞いて、かける言葉が見つからなかった」と、やりきれない思いを抱く学生もいた。仮設サロンから帰る際、「また会おうね。」や「また来てね。」と、住民の方から声を掛けていただき、ボランティアバスは継続していくことに意義があり、福島に足を運び、自分の目で見て仮設住宅での暮らしの変化や住民の心の変化を感じ、考えていくことが今後の課題である。

7. 災害医療セミナー

福島県立医科大学における災害医療セミナー１日目はまず、社会医療法人里仁会　興生総合病院の田治明宏さんのご指導による、災害時において大勢の傷病者が現れた場合の対策を、「マグロを仕分けしてできるだけ高額で取引する」ことに置き換えたプログラムで演習し、トリアージの考え方と取り組み方について学んだ。次に、南相馬市立総合病院　研修医の岩崎陽平先生から南相馬市での支援のお話を聞いた後、国立病院機構　災害医療センターの小早川義貴医師からは災害医療の考え方について、河嶌譲医師からは国際援助隊としてバヌアツ共和国に派遣された話、小塚浩看護師からは中国・遺棄化学兵器処理事業について、伺った。また、ネパールで活動された理学療法士である浅野直也さんのご講演もあり、「災害医療の現場で実際に何が行われているか知れてよかった。」と災害医療の現場で働く方からのお話に災害医療の現場のイメージをつかめた様子であった。夜には懇親会を行い、ご講演された先生方や福島県立医大の学生と交流を深めた。セミナー２日目は、災害医療総合学習センターの熊谷敦史先生による、『福島の現状』の講演を聞いて放射線の知識を深めた後、実際に放射線測定機器を使って、野外で放射線を計測した。『リスクコミュニケーション演習』では、被災者の健康相談を相談者と被相談者の役に分かれて行う中で、「被災者の不安な気持ちや、相談を受ける側の被災者

福島医大での災害医療セミナー
マグロを例に災害医療について学ぶ

に寄り添う姿勢を身をもって学ぶことができた。」と話す学生がいた。２日間にわたって行われたセミナーを通じて、参加学生からは「自分たちがいかに知識が不足しているか、また被災者のバックグラウンドを知ることの大切さ、災害医療の実態についてなど多くのことを学んだ。」「実際に測定機器を使用して、目に見えない放射線を測定したことは刺激的であった」「これを機に、さらに自ら災害医療について深く学んでいきたい」という声があり、充実した有意義なセミナーであった。

8. まとめ

今回のボランティアバスは 1 年生の参加者が多く、初めて訪れる福島県にさまざまな想いを抱いたようだ。「復旧作業が進んでいるのではと思っていたが、当時テレビで見た状態のままの場所もあった」「阪神淡路大震災の４年後と比較しても復興のスピードが遅い」など、実際に自分の目で見る被災地の「いま」を感じとっていた。「いったい何年後に人が普通に住めるのだろうか」「福島県から帰って来てできることは何か」参加者にとってはこれからに繋がるボランティア活動になった。

はじめは「私たちがボランティアをすることで被災地の人の何の役に立っているのだろう、何ができるだろう」という意見もあったが、「去年も来てくれたよね、ありがとう」「また来てね」という言葉もいただき、継続することの大切さや住民の方々との繋がりを感じはじめた人も多かった。実際に自分の目で見て考えたり、不安に耳を傾けたりすることは医療従事者になる私たちに必要な力だと思う。まだまだ復興中の福島県をすこしでも多くの学生に見てもらい、各々が「震災」について考えてもらうためにも、このボランティア活動をつづけていきたい。

9. 協力

独立行政法人国立病院機構災害医療センター
福島県立医科大学災害医療総合学習センター
南相馬市社会福祉協議会南相馬市災害復旧復興ボランティアセンター
公益財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構福島県青少年会館
東京電力株式会社福島復興本社
Fukushima WILL（福島県立医科大学学生災害ボランティアグループ）
Wakayama Will（和歌山県立医科大学学生災害ボランティアグループ）